

第2回 富山県経済・文化長期ビジョン懇話会 議事要旨

1 日時：平成27年12月3日（木）10：00～12：00

2 場所：県民会館8階バンケットホール

3 出席委員（五十音順）

遠藤会長、数土特別委員、田中特別委員、中西特別委員、西村特別委員、朝日委員、稲垣委員、岩田委員、梅田委員、可西委員、神川委員、河合委員、川村委員、杉野委員（代理）、高木委員、田中委員、中井委員、永原委員、水口委員、吉田泉委員、吉田忠裕委員、綿貫委員

4 議事

- (1) 数土特別委員「リーダーとはどうあるべきか ～地方創生に向けて～」
- (2) 意見交換

5 発言要旨

(1) 開会挨拶 石井知事

- ・ 前回（10月16日）では、委員から多くの貴重なご意見を頂き、また、第1回青年部会（11月9日開催）でも、期待していたとおり、若い世代ならではのいろいろな良い意見が出て、大変うれしく、心強く思っている。
- ・ そこで、まだ、長期ビジョンの取りまとめまでいたっていないが、来年度の当初予算において、経済・文化長期ビジョン枠を設けて、これまで色々議論いただいた方向性を踏まえたモデル的または先行的施策を盛り込むことにしたいと考えている。
- ・ 今後、青年部会において、経済・文化について検討を進め、来年3月末までには意見の取りまとめを行ってもらい、4月に開催する第3回懇話会で、懇話会委員と青年部会委員との交流、意見交換の場を設けたいと考えている。
- ・ 来年の初夏ぐらいまでに長期ビジョンを取りまとめしていくこととし、それをしっかりと実行することで、富山県の新しい未来をしっかりと築いていき、そのことが日本創生の一翼、一端を担うことにもつながっていく、との意気込みで取り組んでまいりたい。

(2) 数土特別委員からのプレゼンテーション

「リーダーとはどうあるべきか ～地方創生に向けて～」

- ・ この1年、私が色々なところで講演している中で、共通して言っていることは、人材の育成、それから確保、リーダーシップについてである。また、増田寛也元岩手県知事とも話しているのは、やはりリーダーについてであり、また、マネジメントの重要性についてである。

資料1-1.

- ・ 最近、私が、非常に違和感を持っている言葉が二つある。
- ・ 一つは、「失われた10年、20年」。この言葉が日本を駄目にしていく象徴ではないか。これには、主語がない、目的語もない。「失われた」ではなく「失った」であり、誰が、何を失ったのか全く他人事である。私は、われわれが新しい価値を創造する、しかも継続的に創造する、という能力を失っ

たと思う。新しい価値を創造し、しかも継続的にやるということは、国、企業、大学であろうが、全く同じではないか。

- ・ もう一つは、「権利と義務」である。駄目な会社のトップほど「俺の権利は」と言う。順番が逆で「義務と権利」である。わずかな人数のイギリス人が、メイフラワー号で北米へ渡ったときには、食料、知恵、体力など全てのものをコミュニティに出した。すなわち、義務を全身全霊で出して、それで自活していけるという環境になって初めて、権利を平等に分けようということだったのではないか。

バブル崩壊以降使われている「失われた 10 年、20 年」や「権利と義務」という言葉は、特にリーダー・指導者が、そういうニュアンスでしゃべってはいけない言葉だったのではないか。

- ・ スクリーンのグラフは、OECD 加盟国 34 カ国の国民一人当たりの GDP 水準（購買力平価・円換算）を示したものであるが、日本は 90 年・91 年は 2 位だったのが、95 年には 8 位、昨年は 17 位になっている。今年は何安・ウオン安になっているから、韓国とほとんどイコールか、逆転している可能性がある。われわれは韓国よりも経済力も文化力も相当上なのだと思っているかもしれないが、データはそうっていないというのが真実である。

- ・ スクリーンのグラフは、ASEAN 各国と日本、米国、英国、ドイツにおける企業の役職員報酬の比較をしたものである。日本の部長級の給料は、タイやフィリピン、ベトナムよりもはるかに高いだろうと思われているかもしれないが、実はほとんど同じで、今年はおそらくタイやフィリピンに追い抜かれているのではないか。役員報酬（執行役員）も日本はアメリカの 4 割の水準であり、タイ、ベトナム、フィリピンにも抜かれている。

これは、部長や執行役員の生産性、新しく価値を創造する能力が、日本はアメリカの 4 割で、タイ、ベトナム、フィリピンに負けているということを示している。文化分野や教育分野はどうか分からないが、今後、経済、文化、教育は混然一体となって進んでいくのではないか。

日本、富山県でも部長以上の待遇がこれだけしかできないような会社では、日本の大学を出る有能な人材をタイ、フィリピン、ベトナムに取られてしまう。日本で人材をせっかく育成しても、取られるリスクが非常に大きいということである。われわれが、価値を創造する能力を高め、会社の成果に合わせて、あるいは組織の成果に合わせて、報酬に反映できるようにしなければならないと、この数字は言っているのではないか。

資料 1-2.

- ・ ところで、なぜ価値創造能力なのかということ、どの組織であっても、高等教育の大学教育であっても、成長というものが無いといけない。100 年前の大学、地方自治体と同じであってはならない。

ソ連が崩壊したロシア、あるいは中国が成長してきて変わったことは、商品・ビジネススキームの寿命が非常に短くなったことであり、5 年持てばいいのではないか。ソニーのウォークマンが出たときは 10 年ぐらい持つ商品寿命であったが、今では 3 年たったらもう売れなくなった。そういう中であって、組織は新事業構造、新しいビジネスモデルを創出していかなければならないが、どの組織であっても、そのときの目の付けどころは、「人」「もの」「金」「時間」である。これらの生産性を上げていかなければならないときに、5 年前に通用していたビジネススキームや商品寿命といった既存ビジネスを破壊してしまう覚悟がなかったら、みんな負けてしまう。

日本が GDP 2 位となった 1990 年頃から、日本の経営者は、調整型の社長が太宗を占め、その社長

が取締役会長、取締役相談役となっていく。いつまでも先輩・後輩の関係が続き、社長が意見を言えない。そうすると、5年ごとに激変していく企業を取り巻く経済、政治、文化的な環境に追従できず、後れを取り、このことが弱点となる可能性がある。これは、地方・中央、大学、研究所、自治体を問わず、こういうことがあるのではないかと考えている。

資料 1-3-1.

- ・ 私は「人材の確保」には二つの面があると思う。一つは全体のレベルを上げる人材教育による人材の確保。これは非常に重要であり、会社、地方・国に関係なく、どこでもやらなければいけないが、一番大事なのはトップやリーダーという人材の確保である。このトップやリーダーは、一般的な社内教育や社外の教育で一律に確保できるものではなく、そういうセンスを持った人をピックアップして確保するしかない。曹操、ナポレオン、織田信長もみんな人材をピックアップし、登用したのである。今では、2段階抜きでの登用も当たり前で、順送りの登用では、5年や3年で激変する経営環境の変化にはついていけない。

また、人材を育成するというのは、基幹を成す人材のレベルアップという人材育成などであるが、こうした人材育成には金を掛けないといけない。会社や大学の資産には大体税金が掛かるが、人材には税金が掛からない。こんな有利なことに挑戦せずはどうするのか。私は人材こそ最大の資産だと思っている。

資料 1-3-2.

- ・ 特に、地方の創生、経済・文化の活性化にはリーダーが必要であるが、どういうリーダーを想像しているのかというと、まずは、トップ、リーダーになる人はチームビルダーでなければならないということ。ある発想をうまく行うためには、地域の人に上手にPRして理解してもらう人、それから必ずなにがしかの金が要るので金融を任せる人、組織をちゃんと運営する人など、いろいろな能力が必要となり、こうした能力を持つ人をチームビルディングしていくのであり、人材をピックアップすることも非常に必要なことである。

- ・ それから、何か事業を起こそう、文化的なものを構築して行こうとするときに、トップの発信能力が重要だと言われているが、私の経験からすると、急に社長や財団の理事長になったときから発信をするというのはおかしい。1を発信するためには、10、100を受信しなければならないので、受信能力が高くないと発信はできない。発信能力を高め、自分を高めていくときには、受信を最初から心掛け、受信能力を高めていくことが非常に重要である。

また、高等教育や中等教育では、欧米の方が日本より相当進んでいるのではないかとと思う。なぜかということ、教育の中で、彼らはダイアログ（対話）やディスカッション、ディベートを採り入れ、特に、異質者とこれを行う。異質者とは創造的コンフリクト（衝突、摩擦）も生じるが、これをなくして新しい価値は出てこない。われわれは、異質者と、しかも衝突し、衝突した後にある価値を見いだすことが非常に苦手であるが、それでないといけない。また、こういうことをやるには、相手に対して敬意を持つこと、ダイバーシティを感じる人たちに敬意を持つことが非常に重要で、ダイアログ、ディスカッション、ディベートの後には必ずノーサイドということも重要である。

- ・ それから「胆力」。いろいろな成功例を聞いているが、ビジネスでもトップは度胸を決めていないと駄目で、度胸がなく、どうしようかとみんなから意見を聞いて多数決でやったときに成功したということはあまりない。しかも、3年や5年で経営環境が変わっていく中、地方でも、そういう組織ができたなら、何としてもそれをやり抜くという決断力、度胸というものを資質として持っている

人をリーダーとして登用すべきでないか。こういう話をすると、そんな人は誰もいないよと言われるが、いないからこそピックアップするのである。

資料 1-4.

- ・ 本日の講演で最初に言ったことは、今まで創造価値を言われていなかった分野にも当てはまるし、地方創生にも当てはまる。継続的な新しい価値の創造こそ重要であり、それにはリーダーが非常に大事であるが、小さなグループでもリーダーを任せられる人は必ずいるのではないか。
- ・ 富山県にも様々な大学があるが、大学と地方行政や地方社会とのコラボレーションは、非常に大事でないかと思っている。特に、これからは、ファイナンスやアカウンティング、セールス、ヒューマンリレーションを大学の工学系など理科系の人が、大学や大学院、ドクターコースで勉強するような環境を整えるべきではないかと思う。
- ・ 資料の最後に「報酬のUP」とあるのも非常に重要な点である。しばらく前の富山県の最低賃金は第17位で、私が想像していたよりも良かったが、何としても10位以内に入ってもらわないといけない。10位以内は100万人以上の都市を持っている県はほとんどなので、富山はそういう点では非常に高いが、まだ800円にはっていないので、ぜひ1000円ぐらいに上げてもらいたい。それが、またいい循環を生むのではないかと思う。

(2) 意見交換

(A委員)

- ・ 数土特別委員の話を伺い、まさにそうであると、価値創造能力が非常に重要で、それは人間、人材にこそある。そして、そういう目で見ると、これをどういう形で富山に突っ込んで議論ができるだろうかと考えていた。

一つは、やはりここにしかないものをうまく見つけ出さないといけない。ここにしかないものとは何だろうというと、一つは、文化と経済の接点が、ここの地域では非常にユニークでないかと感じている。伝統文化が生きていて、なおかつ、新しいモダンなデザインがあり、それが融合して、それがコミュニティーの中にちゃんとある。そういうところに人材が魅力に感じて、来てくれれば、そういう人たちが新しい経済の力になり得る。そういう意味で、経済と文化というものをうまくつなげるような、文化があるところに経済の力があって、経済の力が加わるところに新しい文化が生まれるというように相互作用があるような長期ビジョンがすごく大事で、富山はそれにふさわしいところでないか。だが、資料3の論点整理(案)では、経済は経済、文化は文化という感じになっているので、その接点のところが少し弱いのではないか。

- ・ 富山の外から見ていて、どういう富山の個性に魅力を感じるかというと、例えば、富山に降った雨は全部富山湾に流れ込むが、こういうところは富山県と滋賀県ぐらいである。また、分水嶺で県域が分かれているところは、そう多くはない。つまり、富山は、必ず入ってくる時に山を越えて入ってくるという地域であり、ビジュアルに絶対のイメージがある。なおかつ、降った雨は必ず富山湾に流れ込むので、循環型の生態系を、地形が劇場で、富山湾が舞台で、平野部が観客席で、大向こうに立山があるということを誰もが実感できる。こういう循環型の社会で、安定した文化がかつてからあるということが非常に強い。それと同時に、新しいものにもチャレンジしていく。ものづくりだけではなくて、新しく世界に打って出て、きちんとした競争ができる、例えばデザイン戦略というものが必要でないかと思う。

富山駅にモダンな電車が駅構内に止まっている風景は日本ではここだけで、世界でもほとんどな

い。通過型の駅に路面電車が駅舎の中に入るといような構造を持っているところは、ヨーロッパではまずない。ヨーロッパ、特にドイツやフランスの都市は、どこも路面電車が非常に重要な交通のツールであり、地域のまちづくりのシンボルとして、すごくいいデザインで魅力的なものとなっている。地域がいかに投資をして、努力をしているということが目に見える形で分かる。世界でも珍しい富山のこうした光景を新しい生活のデザインとして戦略的に発信しているのだと思うので、この地域はデザインや生活の王国だと言えるのではないか思っている。こういったことがクリエイティブな人を引き付け、クリエイティブな経済的な価値が生まれてくるようなローカルな戦略をつくるというのが、経済・文化の長期ビジョンではないかと思う。

「王国」という言葉がちょっと気に掛かっており、事前意見では「生活王国」としていたが、「生活デザイン王国」がいいかもしれない。この言葉は、栗で有名な小布施堂の市村社長が「産地じゃいけない、王国になるのだ」と言っているのだが、なぜかというと「栗の産地」というと産出して出すだけという生産基地になるが、「栗の王国」というと栗の文化が根付き、豊かな生活を自分たちが一番それを楽しんでいるということにしないといけないということ。これは、富山全体で考えても同じことが言えるのではないか。「ものづくり」と言うと産地的なので、富山はその「もの」を使った王国となる、王様は生活者で、こういう豊かさがある、そこに魅かれてクリエイティブな人や産業がくるだろう。

- ・ また、最近のフラットになった世界では、ネットをうまく使うことで、いろんなところで産業が回ってきていることをプラスに生かせるのではないか。そういうふうな戦略をうまく書き込むと長期ビジョンへと昇華するのではないかと感じている。

<事務局より配付資料説明>

(遠藤会長)

- ・ 資料3については、基本的視点を明らかにして将来ビジョンを考えるという点では、一番右側の「目指すべき将来像」に記載されている大きな展開を議論いただくことが大事であると思う。「とやま未来創生戦略」は具体的な戦略が挙げられているが、「目指すべき将来像」は、新しい展開をどう図ろうかということになるかと思うので、このような趣旨で、それぞれのご意見を頂きたい。それに先立ち、杉野委員及び吉田委員よりそれぞれ提出された関連資料をご説明願いたい。

(杉野委員/代理 杉野岳)

- ・ 資料5には、私の基本的な考え方に対して、弊社スギノマシンがどのような具体的な行動を行っているかを記載している。弊社はちょうど80周年を迎えるに当たり、100周年に向けてのあるべき姿というものを策定しているが、富山県が今後どのように進んでいくべきかと、会社としてどういう活動をしていくべきかと、ということが非常につながっていることから、記載したものである。
- ・ イ)の技術オリエンテッド、「超技術」、グローバルニッチトップの追求は、今まで弊社がずっとやってきた活動そのままであるが、これを世界規模で発展させていくというのが一つあるべき姿なのではないかと考えている。これは、基本的な考え方の②③⑦と関連している。もう一つの軸として、弊社の売上げの約50%が海外企業との取引であり、おのずと海外の方々と仕事をする事となる。グローバル化が叫ばれている中で、よく教育、留学、外国人の受入れという話となるが、私としては、そのような形ではなく、日常の中でどれだけ異文化と接触するか、好むと好まざるとに関わらず接触するということが一番のグローバル化なのではないかと思う。もっと言うと、グローバ

ル化という言葉自体に若干違和感があり、例えば、富山の人が東京の人と接するとかということ意識しないのと同じように、外国の方々と普通に日常的に仕事をするということなのではないか。弊社でも現場の機械作業や組立作業の人も、普通に海外出張に行くし、海外のお客様とも一緒に仕事をしているので、日常の仕事の中で違和感というものをなくしていきたい。

- ・ また、二)の国内国外を問わない共同研究、提携、M&Aを進めている。基本的な考え方の⑥にあるように、あまり「富山」という枠組みに捕らわれ過ぎるべきではないと思っている。ただし、枠組みに捕らわれ過ぎるべきではないが、やはり富山ということに軸足を置く、心のよりどころを置くということが非常に重要であると思う。欧米の各都市や各企業を見ていると、必ずしも大都市にならない企業、あるいは大都市でない地方都市が非常に特色を持っており、自分たちがそこにいるということに何か意義を持って仕事や生活をしている。また、ヨーロッパ、特にドイツなどであるが、他の企業や都市に対して非常にライバル意識を持っていることを感じる。歴史的に、都市国家や小さな国から、小さな領主の家から成り立っているような文化があるので、非常に近隣との切磋琢磨、あるいは独自性というものを非常に出しているのではないか。日本はどうしても中央集権のイメージが強いが、昔は各藩が独立独歩でそれぞれの特色を出していたという歴史があるので、あまり都会と同じことをするのはない、同じものを求めるのではなく、なぜ自分たちはここで生きているのか、ここで仕事をしているのか、ということを追求していきたいと思っている。
- ・ ホ)のスペシャリスト要員の採用増、人事制度、匠制度とあるのは、基本的な考えの⑦のスペシャリストを評価するということと関係する。私は、職業や職種に卑賤なし、尊いとか卑しいとかがないという言葉が非常に好きで、仕事がなぜ世の中に存在しているのかということやはり世の中に必要とされているからであり、全て等しく世の中に求められている非常に尊い仕事であると考えている。ところが、日本では、ある職業は非常に尊くて、ある職業は給与や社会的地位に関してもさげすまれるということがある。会社の中の制度でもそういうものが見受けられるが、これをなくしていきたいと思っている。
- ・ 全てをまとめると、基本的な考えの③、あるいはロ)の「権利と義務」「使命」「自分の存在意義」「自社の存在意義」が非常に大切だと思う。自分は何をなすべきか、なぜ自分たちは世の中に存在を認められているのかということをよくよく考えて仕事をする、あるいは生きていきたいと思う。弊社においても常に驚きを提供し、世の中に貢献していく。家族、家庭の幸せを築いていくという、こういう何か自分の存在というものをしっかり自覚して、義務を果たしていく、使命感を持って生きていくことが重要であると考えている。

(吉田泉委員)

- ・ 提出した資料6は、芸術文化分野で3点に絞ってある。
 - 1点目は、富山県の独特の芸術文化活動の推進体制である。芸文協が43年前に設立されたが、創立メンバーにとってさえ、今日の富山の芸術文化の隆盛は想像だにできなかった、と聞いている。このように今日、隆盛・振興を迎えている根本には、県、マスコミ、芸文協の他県に類を見ない三位一体の盤石な体制があるのだと思う。
 - 2点目は、子どもに特化された国際フェスティバルである。来年7月30日から開催される「とやま世界こども舞台芸術祭2016(PAT2016)」は、富山で4年に1回開かれている国際フェスティバルで、モナコ、ドイツのリンゲンと共に「世界3大アマチュア演劇祭」の一つと言われているが、1983年以来10回目となる記念すべき祭典となる。このフェスティバルは、芸文協の人脈ネットワークを基本として行っているものであり、東京を仲介しないバイパス型の海外文化交流である。これを今

後もますます促進されていくべきだと考えている。世界の子どもたちが参加し、父兄を多く取り込んだ500人以上のボランティアが一丸となって、富山にいながらにして、海外の子どもたちに出会い、異文化に触れ、舞台との一体感によって、直接の深い感動を受けることの意義はとて大きいと思う。

- ・ 3点目は、伝統芸能や生活文化への力点として、20年、30年後はますますグローバル化が進むが、そういった均一な状況になればなるほど、逆に人間というのは各人の差異や個別的なものに引かれていくのではないかと思う。だからこそ、伝統芸能や生活文化に対して、私たち自身が理解を深めて、次代の子どもたちに伝えていかなければならない。
- ・ 芸文協としても色々な側面からお助けしているが、少子高齢化の波を受けて、これらに携わる方々の数は減少の一途である。しかし、富山はまれに見る自然災害の少ない土地柄であり、北陸新幹線の開業もあり、県外、海外から流入人口増がますます期待できる環境の大きな変化の中で、逆に多様性を受け入れ、かつ豊かな人格を持つ子どもたちを陶冶していくこと、そして、その一助として働くことが芸術文化協会の役目ではないかと考えている。

(遠藤会長)

- ・ 杉野委員にお聞きするが、人材の育成で色々取り組みをされているようだが、会社として、人材育成にどのぐらいお金を掛けているのか。

(杉野委員/代理 杉野岳)

- ・ はっきりした金額は答えにくいですが、時間で言うと、稼働時間の5%以上は掛けているかなと思う。

(B委員)

- ・ 今の発言は非常に重要である。杉野委員は5%と言われたが、それはいかがだろうか、私はやはり50%はあると言わないといけないと思う。なぜならば、T&Mや売上げが50%だと述べておられるので、50%分掛けていると言った方が、貴社のためにもいいのではないか。

(杉野委員/代理 杉野岳)

- ・ そのとおりで、教育という別個の枠で言うと5%程度になってしまうが、OJTや日常的な経験での教育という意味で言うと、弊社でも8、9割が教育ということになる。

(B委員)

- ・ そのとおりで、オン・ザ・ジョブ、実務ということがこれから非常に重要になってくる。

(C委員)

- ・ 配付資料で重点的に拝見したのは「青年部会の議事録」である。その中で、非常に感心と言うか、気に入った言葉が「ないものねだりよりも、あるものを活かそう」という観点である。私も小さいころから、「富山って何もなくて何がやちゃ」という発言を大人から頭の中に刷り込まれた。本当はたくさんいろいろあるにもかかわらず、まだ生かしていない。

例えば、私は小中高と城山へのサイクリングロードを自転車で登るという楽しみ方をしていたのですが、ネットでサーチしてみると、氷見から朝日町に至る富山湾をずっと巡るサイクリングロードがあった。一つ一つは小さいかもしれないが、沿道にはいろいろな名勝があり、全部見るとかなりの

コースになる。海外では、自転車と一緒に電車に乗れるところもある。富山は鉄道沿線にあるので、全部を踏破する必要はなく、行きたい所だけを見ることもできる。最近、京都では、海外の家族の方が、私たちが普段住んでいるようなところをブラブラ、あるいは自転車に乗って観光している。私たちにとっては、こんなの当たり前だ、あるいは古いもので価値はないよというものが、特に海外、県外の方にとっては非常に新鮮に思えるということが多々ある。

こういったことを積み重ねるのがよいのではないか。数年、あるいは5年先の話としては、最初に新たに何か投資するということなく、今あるものを活用すればよいのではないか。USJ や東京ディズニーランドも、リピーターのためにアトラクションをどんどん更新しているのであり、少しずつだが成功体験を積み重ねて、数十年先までも含めて積み上げていくという、あるものの中から新たな価値を生み出すという、「ないものねだりよりも、あるものを活かす」という観点を、ビジョンの中に取り入れてもいいのではないか。

特に、海外の方が定住するときには、もちろん大きなアトラクションも必要だが、家族で普通の週末に楽しめるもの、それが例えばサイクリングであったりするが、そういったところを海外の方にも分かりやすく、インターネットのSNSなどで、口コミでどんどん広がるということもあるので、県としてもそんなにお金を掛けずにできるのではないかと思う。

(D委員)

- 資料3の論点整理(案)は、ちょっとトリビアル過ぎて、ビジョンが全く見えてこない。なので、やはりビジョンというものをどのように考えるか、それから具体的に何かということ、まずどこかできちんと議論しないと、今の段階での立ち上げに進まないのではないかと思う。数土特別委員の話もやはり人材、基礎づくりということを大変強く述べておられるし、私も前回の会議で文化の根幹は教育だということ述べているし、そういう意味で言うと吉田委員の意見もまさにそうである。30年ぐらい前であるが、通産省の委員会で、外国に品物を売る、輸出するのに、日本というマークを付けて売らなければならないということに気が付いたが、われわれは役人だから「日本」を知らないの、「おまえたち、集まって日本を議論しろ」という会議があった。

まさに文化の付加価値というもの、付加どころかメインの価値になるかと思うが、そういうことがあらゆるところで今まで考えられてきたので、早くそういうものを基準にしたような新しいビジョンの整理をしていただきたい。これでは、どこの都市にも通用するようなものがないわけではないので、やはり、富山とは何か、どういうふうにしたらどうなるかをきちんと位置付けていくことが必要で、皆さんが言っている富山のユニークネスがまだまだ見えてきていない。

例えば、富山は売薬が有名だが、東京の風呂屋は富山出身者が一番多いという話も聞く、薬とお風呂という、こんなに人体を尊重する県はないわけで、そういう意味では人間の命の尊重が県であるということも言えるので、それに向かってどうするか。

- 前回の会議で、教育に関して藩学教育を県の体制でやったらどうかということ、遠藤会長からも暴論ではないという意見をいただいたうえで、述べた。さりとて、教育体制というのは日本に厳然としてあり、大学はこうであると明治以来決まっている。それが段々と格付けもできていろいろ変わっています。

しかし、その中で、富山で教育のダブルスタンダードとして、学校制度で決められた国の制度として小学校から大学というものがあるが、もう一つ別の柱として、生活的な教育の場、英語の duty を訳した精神的な、モラル的な duty というのを持った教育制度を創っていくということを打ち出せば、他県にはないのではないか。そういうことを年明けに進めてほしいと思う。

(遠藤会長)

- ・ 例えば、資料3の論点整理(案)に基本的視点が記載されているが、こういう現状だからこそ、何をすべきか、というのがビジョンということでしょうか。

(D委員)

- ・ そのとおりですね。

(遠藤会長)

- ・ 分かりました。まさに、こういうベースのところ、次回の会議で新たにビジョンを明確にして、そして一番目指すべき将来像に向かって、われわれが何をすべきかを考えていくということになると思います。

(B委員)

- ・ 青年部会の発言の中で、健康寿命日本一を目指そうというのは非常に重要なビジョンではないか。日本の寿命と健康寿命の差が非常に大きいことは、人、もの、金、時間を非常に無駄遣いしていることとなる。富山が健康寿命日本一となれば、経済、文化の問題は一挙に解決する。そして、新しい高齢者の価値の創造にもつながる。今は嫌老社会だとか言われているが、老人の存在意義を高めるためには、やはり健康であることが非常に重要ではないかと思うので、少子高齢化の点で、他の県と重なってもいいので、ビジョンとして具体的なものを打ち出してほしい。

(遠藤会長)

- ・ ちょうどいい機会ですので、藤井代表幹事より、青年部会がどのような雰囲気だったか、ちょっとお聞かせ下さい。

(藤井青年部会代表幹事)

- ・ 第1回の青年部会も、このような形で、30名の方から1人2分という形で意見を頂いた。その中で、指摘があったような、生涯現役の話、健康寿命の話であったり、人材育成であったり、あとはベンチャー企業への投資だったり、活発な意見は出たが、まだ本音を話していないという感じだったので、次回会議では本音が出るようなグループワークを行うこととしているが、また、その報告をさせていただきたい。

(遠藤会長)

- ・ 知事が別件のため退席されるので、これまでの意見についてコメントをいただきたい。

(石井知事)

- ・ 数土特別委員の人づくり、特に、こうした変化の激しい時代に、次の時代を担うリーダーをどう育成していくか、普通の研修では育成できないので、見つけるしかないのだという点は大事な論点だと思う。
- ・ D委員が言われた文化の根幹教育。また、資料3の中の目指すべき将来像(論点)が、ちょっと物足りないという話があったが、委員の方々からいろいろな議論を頂き、次回までにこれが富山県

として目指すべきビジョンで、そのための骨太の政策の柱、方向ではないかというふうにまとめられれば考えている。

- ・ C委員からの「ないものねだりよりも、あるものを生かそう」という視点は非常に大事である。「世界で最も美しい湾クラブ」への加盟が承認されたこともあり、湾岸サイクリングロードも整備しているが、さらに「田園サイクリングコース」も整備も始めている。
- ・ A委員からの、富山県は経済と文化の接点として例えば伝統工芸、あるいはデザイン振興への取り組み、そうした点で非常に特色があるのではないかと、また、単なる産地ではなく、王国にしていくなさという意見は、もっともな良いご提言である。
- ・ 健康寿命日本一は、とやま未来創生戦略でも目標として掲げているが、B委員の言われた、高齢者本人のためにも寿命いっぱい健康で、いつまでも輝いて生きてもらう、社会にも貢献してもらうことは大変大切なことなので、大きな目標の一つとして取り組んでまいりたい。

(E委員)

- ・ 富山県は自然災害が少なく、安心・安全な県だね、と言われることを私は一番誇りだと思っている。これは先祖の代から守り、自然災害に遭っても対応して施策などを進めてきた富山県の姿ではないかと思うので、次の子どもたちにも、きちんとした形で自然を渡していくというのが一番大事ではないか。その上での経済であり、文化であると思う。
それから、青年部会でのグループワークでは、経営者の考えばかりではなくて、女性の立場からもっと日々の生活の中の意見をたくさん出していただければと思う。

(F委員)

- ・ 富山県は日本一安全な県を目指すと言われているが、地震・津波等の天災の部分だけではなく、人災の部分でも日本一を目指していただきたい。今年は、非常に交通死亡事故が多く、特に高齢者の夜間の事故が多いので、高齢者に優しいまちづくり、道路づくりを目指していただきたい。これからますます高齢化が進んでいくので、治安の面、また、交通の面においても、日本一安全な県であるということを目指していただきたい。

(G委員)

- ・ 資料3は大まかな形で取りまとめられているのではないと思う。少子高齢化の「採るべき展開方向の考察」を見ても、やはりどうしても短期的・中期的には社会増ということを目指さざるを得ないのではないかと。そうなってくると、富山県全域が全て平等で公平な社会増というのはあり得ないので、どうしても中核市へ集中させるのは避けて通れないと思うが、その中で、富山市への一極化なのか、高岡市も含めた二極化なのか、県としても中々言いにくい点だと思うが、その方向性を探っていただきたい。富山市を見ていると、正直言うと一極化になりつつあるという感じがしている。例えば、環水公園は、材木置き場だったのが、立派に整備されて都市空間としての環境整備が進められている。そのあたりを二極化に進んでいくのか、私どもの立場としては、高岡に対する県としての投資をもっと積極的をお願いしたいという思いもあるが、そういうふうにならざるを得ないか。
- ・ もう一つ、そうやって中核市への集約が進んでいくと、中山間地の問題にもなる。そうしたときに、A委員が述べられた循環というものをどうしていくのかということになるのではないかと。富山の場合は、やはり水資源と炭素資源のきちんと循環させることが大切であると思う。水資源の循環

では、高付加価値の農産物ということが書いてあるが、水田の持つ保水力はすごく富山にとって大切であると同時に、地産地消だけではなく適地適作ということを考えていくと、水田の生産性をいかに高めながら、水田農業をどう推進していくことが大切だと思う。

もう一つの炭素資源の循環でいうと、水や全てのものが森林資源の恵みであると考え、クロス・ラミネイティド・ティンバー（CTL）とバイオマスエネルギーを中核に据え、そういう森林資源をうまく循環させた炭素資源の循環的な活用を考えていくべきではないか。

（遠藤会長）

- ・ 最初に高岡の部分を言われたが、富山県だけでものを考えていいかという話もあると思う。北陸という視点で見ると、いろいろご意見があると思うが、富山県のそれぞれの自治体が、その特徴を生かしながら、全体としてどう将来像を描いていくのか、という指摘ということかと思う。

（G委員）

- ・ というか、都市空間の整備という意味では、やはりある程度、投資の集中化というか、選択と集中はせざるを得ないのではないかなと思うが、それを一極でやるのか、それとも、高岡というまちもあるので、二極でいくのか、ということを考えていただきたい。

（遠藤会長）

- ・ その辺のところも組み込みながら、事務局の方でまとめてほしい。

（H委員）

- ・ 資料3には、A委員の「ここしかないもの」、C委員の「あるものを生かそう」、D委員の「日本を知る」という観点が抜けている。それは何かというと、外務省は、外交官に日本の文化・歴史、各地の産業の特性を徹底的に教えて会議に出す。同じ観点からいうと、資料3の3頁目に少し記載してあるが、ふるさとにどうすれば誇りを持てるかという観点が無い。具体的には、ふるさと教育、ふるさと学を急いでやらないといけない。

また、伝統文化を守っていくという観点が無い。富山は何もないというイメージが強いが、例えば、伏木のけんかやま、高岡の御車山、砺波の子供歌舞伎、城端宵祭りはすごい。13年前は1町内で6題ぐらいの小唄が歌えたが、人が減ってきて、また、練習の機会もなく、開催日も5月15日だったのをGWとして、やっとそれで1題歌えるという状態で、もうすぐなくなるのではないかなと思う。おわらも青年女子、男子は、それぞれの町内から10、20人だったのが、今はせいぜい3人である。金沢の芸妓さんの文化は、県と市が補助することで残ったが、富山でそういうものがないというのがちょっと残念なので、強く伝統文化を育成して県民に知らせていくことが必要である。

- ・ 商工会議所で産業観光をやっているが、観光だというと断られるところもあるが、富山大学にも学問として追究すると言ってもらっているが、観光とビジットと探究ぐらいに分けて、できないか。キザニアなどはあるのが、まだどこにもない大自然と文化とものづくりをつないだものが、富山でようやくこれが起こりつつある。YKKでは観光で見せるコースと違うコースのちゃんと2つに分けて行っている。このような観点もビジョンの中に入れてもらえないか。

（I委員）

- ・ 資料3の論点整理（案）で、長期ビジョンは全て網羅されているような気がしている。

- ・ 仙台から富山に来た私より2, 3つ年上の女性から「富山は産業もあるし、文化もあるし、伝統も本当にある。富山で電車に乗って、砺波の散居村に行ったが、富山って便利なところだね、富山ってすごいところだね。これも新幹線の効果だね。仙台なんか問題じゃない」と感動して言われたことがすごく誇りに思っている。富山の良さがちゃんと発信されているのだと、うれしかった。

(遠藤会長)

- ・ 仙台出身の私としては非常に複雑であるが、私も実はそう思っている。北陸のいいところは、仙台や東北とは全く違う素晴らしさがあるということである。

(J委員)

- ・ 誇りを持てるということから言うと、富山の人たちは富山の良さを知っておらず、他のところがいいと思っている。例えば、富山で新幹線開業前フォーラムの際に、知り合いが来たときにどこを案内しますかと質問に対して、金沢か立山、と回答があった。高岡の良さを知らないで「他のところがいいのではないか」というところがある。地域ごとに必ず良さがあるので、I委員の仙台の人にも要は仙台の良さも認識したうえで、仙台にないところがいいということでないか。

そういう意味で、これからの生活の中で本当に大事なことは、郷土に誇りを持つことである。地元のことを知らないで、グローバル化も何もない。教育なども含めて、そういうものをしっかりと認識させることが本当に大事なことだと思う。

(K委員)

- ・ 特別委員から本当にいいお話があったので、それに基づいてチェックをすべきである。
- ・ 私が一番嫌なのはすぐ自慢を垂れるということである。自慢を垂れることは、相手によっては逆効果になる。私は今、世界、日本の色々な地域から来られる方たちが何をおっしゃるかをじっと聞いている。そうすると、お世辞で言っているのか、本当に思っているのか、が分かってくる。そうすると、若い人たちが富山に本当に移り住んでくれるか、いいなと思ってくれるかがものすごく心配なので、地元の自治体や企業も含めて真剣にやらなければいけないことだと思っている。そういう足元の問題を解決しながら、ビジョンに結び付くといいと思っている。

(遠藤会長)

- ・ 今の発言は、本当にいいと自分で実感して、行動に結び付くのか、あるいは「いいね」と第三者的に言っているだけなのか、前者の形に集約していけるような富山でありたいということでないか。

(L委員)

- ・ 文化の面で二つ。知事が、ニューヨークに伝統工芸作家も連れて、伝統工芸産業のトップセールスをやったということは高く評価している。特に、伝統工芸作家は、非常に生活が苦しいので、販路を見つけていただくことは大変ありがたい。ただし、世界的に日本の職人芸が評価される、ニュージャポニズムの傾向が出てきているが、伝統工芸に端を発しながら純粋芸術を生み出しているたくさんの人たちにはなかなか日が当たらず、伝統工芸よりもさらに生活が苦しくなるということもあると思うので、そういう分野にも若干目を向けるべきでないか。特に富山県の場合は、伝承美術や伝承芸術といわれる分野が非常に衰退しており、量は増えても、質は全然高くなっていないというのが現状だろうと思うので、ぜひ芸術大学や研究センターみたいなものを設置していただきたい。

- ・ もう一つは、利賀で世界を代表するプロの演劇集団である SCOT が大変活躍しているので、ぜひこれを生かして、利賀に国際芸術村をつくっていただきたい。先ほどの芸術大学やセンターもそこに集めて、利賀へ行けば、世界中のプロが集まってくるということもビジョンに記載してほしい。

(M委員)

- ・ 高校生のアンケートと青年部会の意見を読んだが、子どもたちや青年部会の委員の 20 年後、30 年後ということに対する意見が本当に資料に表れているのか、ということを感じた。これからどんどん討論されるのだということであるが、やはり 20 年後、30 年後に子どもたち、青年部会の委員がチャレンジングな目標、夢を持った形になっていると、もっといいのではないかと感じた。

(遠藤会長)

- ・ 青年部会の委員がなかなか先を読み切れないのだと思うが、それは難しいかもしれないからこそ思いきった忌憚のない意見でやっていただきたい。懇話会はそれを応援するのだと思う。

(N委員)

- ・ 資料3の論点整理(案)の中で、重要なところは少子高齢化ということではないか。30年後に非常に日本の人口が減ってくるということは間違いないが、その中で、前回の会議で話のあった、これから海外からの人をどう受け入れるかである。ISのテロが起こったが、今後日本で起こる危険性もあるので、国も留意すると思うが、富山県としてもそういった点を心配りした方がよろしいのではないか。スイスでは移民は受け入れないとしており、非常に独立性・独自性のある超専守防衛の国であるが、そういった確固とした信念を持っていただきたいと思う。

(O委員)

- ・ 日頃から幼稚園、小中高校生の子どもたちと、踊りを通して向かい合いながら仕事をしているが、そこでいつも思うのは、やはり感性豊かな心を育てることが一番大事なのではないか。感じる、心を動かすという表現が、なかなか言葉で、自分の中でどうするかが分からない子どもたちもたくさんいるので、芸術、文化といったものを通して、いろいろなことを感じていってほしいと思う。
- ・ 子どもたちの芸術文化の環境づくりという中で、人材という言葉がたくさん出てきたが、やはり指導者の大切さ、良き指導者の育成ということも重要なので、充実させてほしい。県は、県内の芸術文化の専門家がいろいろなところに行って指導するという芸術文化アドバイザー事業を行っているが、これをもっと学校教育の中に取り入れられれば、より充実したものになるのではないか。

(P委員)

- ・ ビジョンにおいて、富山県で一番できることは、人の命をつなげていくこと、文化を伝えていくことではないか。伝えることによって、人を成長させることができるということを今日の話を聞いて確信できた。変な言い方をすると、人類が一番命をつないでいくことが苦手な生物ではないかと思うが、命をつなぐことを一番できる場所が富山ではないかと実感している。健康寿命や高齢者の安全性という点で、マイナスの部分を変えていく、そして強みをより強化していくことができるとしたら、富山は伝統文化も含めて教育という視点から子どもたちに伝えていくことができる場所でないかということを感じた。

今日の特別委員のお話、英知をもっともっと若い人たち、子どもたちに伝えていく場面があれば、

すごい環境になっていくのではないかという実感を持った。

(Q委員)

- ・ 他県と違った何か特徴あるテーマ、あるいはキャッチフレーズにしていかなければいけないのではないかと考えているが、30年先に中堅になる高校生のアンケートの中に、まだ人数は少ないが、誇れる県あるいは個性がある県にしてほしいという、意見が挙がってきているので、この点を富山県の良さを特徴づける項目のどこかに入れてほしい。そして「富山が好きだ」と自信を持ち、定着したいというふうに結び付けていけるようにしてもらえればよい。全国でも珍しく県立の多い富山県が、子どもたちに対して真剣に、かつ、子どもたちが納得するような教育をお願いしたい。

(R委員)

- ・ 例えば人口を見ると、2030年に中山間地は1万6000人、富山全体が80万人に減った場合に、富山市や高岡も人口が変わらない、新幹線駅のある黒部もそれなりにいると考えると、残りの市町村はどうなっているのか。病院、警察、消防といった面で、いろいろなところが限界集落に近づいているという厳しい状況をシミュレーションしたモデルを出すべきでないか。
- ・ そうなってくると、どうしても女性の活躍に期待せざるを得なくなるので、女性の能力を活用して、登用していくというふうにしないと、社会が成り立っていかないのではと思っており、そういう点も考慮していただきたい。

(S委員)

- ・ やはりいい仕事をするときには、いい給料を払わなければいけない。
- ・ 国際化は、世界へ行くのではなくて、世界から来てもらえるような場所をつくらなければならないということを実感している。
- ・ 小中高校で、納税教育、納税の必要性を分かりやすく教えるということをやっつけていかないと、高齢化社会も含めて、乗り切れないのではないかと。薬も1錠8万円という高額な薬も出てきており、国の負担も大変なので、納税ということを経済の中でいろいろなことを教えていかないといいのではないかと考えている。

(遠藤会長)

- ・ S委員が社会保障費や医療費の問題とからめて納税者の義務を述べられたが、今度、選挙権が18歳から付与されるが、そこまでに国民としてどういう役割をなすかという教育をしなければいけないだろうと思う。大学になってからでは遅いので、教育あるいは人材育成のターゲットは、幼少期からではないかと思っている。

(石井知事)

- ・ 全般を通じて、人づくり、教育、リーダー論も含めて権利を主張するだけではなくて、義務の問題、納税の問題も含めて、もっと掘り下げた、しっかりした教育をして、そのことによって次の時代の若者をしっかり育てていくべきだという話がたくさんあったと思う。
- ・ できるだけ知識だけでなく感性豊かなお子さんをつくらなければならないための努力をする。人類が一番命をつなぐことが不得手、苦手な生物だという話もあったが、NHKの「ダーウィンが来た！」などでは、鳥も獣も次の時代を担う子どもをいかに守って育成してということをやっているが、

日本人だけでなく人類全体が、次の時代を担う人づくりを本当に命がけでやっているのかという点が少し足りないのかなという気がしている。

- ・ 今日は大変心に残る印象深い話がたくさんあったので、ご意見をしっかり踏まえて、次回はこういうビジョンではないかという点をもう少し整理して、さらに議論を深めていきたいと考えている。その中で、あれもこれもあまり散漫になってもいけないので、ある程度、焦点を絞った議論になるように努力するので、委員の方にはそれぞれの立場でさらなるご提言をいただきたい。

(遠藤会長)

- ・ 次回の来年4月の第3回懇話会では、その間に青年部会の議論、取りまとめ等を踏まえて、骨子案を提示する予定である。骨子案の取りまとめに当たって、場合によっては、会議前に事務局が各委員のところに訪問して、直接ご意見を伺いすることもあることから、様々な形でのご協力をよろしくお願いしたい。

[田中耕一特別委員からの追加意見]

- ・ 添付資料(次頁)は、日本化学会の公式月刊誌「化学と工業」に掲載されたコラムで、事実を淡々と述べる文章になっているが、中身はかなり感動的である。

富山の売薬の話は、富山以外でもある程度知られているが、それが「鱒寿司」「アルミ缶」「アンプル」等々の製造につながった話は富山の人でもほとんど知らないのではないかと思う。

売薬に携わる人は農民で、当時は土地に縛られていたにもかかわらず、自ら薬を製造、全国的な商業を行っていたことに驚いた。

科学・技術は、経済・文化的な背景が良くも悪くも影響する。また、先人の歴史・知恵からも学べることが沢山あり、地元の努力・成果が今を生きる人々を前向きにすることができる。こういったことが、少なくとも他県の方々に伝わっていないのが残念であり、富山県人の控えめな態度「富山は、な～んも無い所ながやちゃ」よりも、これからはアピールすることを促進すべきであると思う。富山県庁の「売薬」のことを良く知っている職員の方々には、「当たり前」と思われているかも知れないが、そういった「当たり前」のことの方が、特に海外の方々は大いに感激することが少なくない。私の経験上、欧米の人は、科学・技術においても、“もの作り”より「なぜそうなったのか？」という”もの語り”や歴史を知ることがを好むし、自国の産業を育てたい新興国からの見学・観光にも貢献できると思う。

この話はあくまでも一例である。これ以外にも、十年～数十年先につながったり、5年以内に増強できる話が沢山あるはず。科学・技術の発展は、経済・文化なくしては進められないし、逆も真である。

近畿支部

富山の地場産業の礎『富山売薬』

富山といえは

富山といえは何を思い浮かべますか？黒部ダム、立山黒部アルペンルート、越中富山の薬売り、ブラックラーメン、ホタルイカ、ますのすし…。

今回は、財政難だった富山藩を危機から救い、現在の富山の地場産業の礎になった「富山売薬」について紹介します。

富山売薬について

17世紀の終わりに、富山藩2代藩主・前田正甫（まさとし）公が薬に興味を持ち、合薬の研究から富山反魂丹（はんごんたん）を開発したことが始まりだとされる（反魂とは、死者の魂を呼び戻すという意味）。富山売薬の基本理念は先用後利（用いることを先にし、利益は後から）として、常に得意先との信用信頼を重視した。また、薬の配置員が回る地域を懸場（かけば）とよび、その地域の顧客管理を懸場帳で正確に把握していた。さらに驚くことに、そもそも鎖国時代にあつて、原料となる麝香（じゃこう）や牛黄（ごおう）などの漢方薬が、中国から長崎に輸入され、さらに長崎から大坂、そして富山に送られるという輸入ルートを持っていたことや、製造された薬を富山から陸路・海路の両面で全国に届ける流

通ルートを苦勞しながら作りあげたことである。この富山売薬が慢性的に財政難だった富山藩の危機を救ったのである。（米原寛、平成13年度県民カレッジテレビ放送講座テキストから一部抜粋）

富山売薬をルーツとした地場産業

まずは「ますのすし」。ご存知でしょうか？丸い木の容器に笹の葉を敷き、その中にすしが包まれ、落とし蓋をして、その上下が竹の割棒4本と輪ゴムでしっかり締め付けられている。それを特製の紙箱に入れて販売。この「ますのすし」のパッケージの工夫が、元をたどれば売薬に行き着く。薬を入れる容器としての曲げ物や薬袋・紙箱などの応用・進化したものが富山のパッケージ産業とのこと。

また、薬の缶から缶ビールや生ビールの家庭用ミニ樽へと発展した。缶ビール容器などを生産している富山の企業は、明治時代に創業した金物店を継承し、ブリキ缶などの薬の容器、そして明治34年（1901年）には日本初のアルミニウム製高貴薬（六神丸など）容器の開発を経て現在に繋がっているとのこと。

さらに、薬品によってはビンやガラス容器がよい場合もあり、製薬工業も発達。ガラスアンプルの開発から、各種の管ビ

ンや理科学器の製造に発展した。また、戦後、ガラスや紙からビニールやプラスチック製造業の発達も促したとのこと。（須山盛彰、平成13年度県民カレッジテレビ放送講座テキストから一部抜粋）

一人三役、農商工連携

富山の薬売りは、もともと農閑期に収入を得るために生まれたため、薬の配置員となった行商人は、農民。それゆえ、農繁期には帰郷しなければならず、旅先で店を構えることはできなかった。その点が、都市部で富を蓄えて豪商となった近江商人などとは対照的だとのこと。

また興味深いことに、売薬行商人は、富山の薬種商から仕入れた原材料によって自ら薬の製造を行い、それを携えて行商した。つまり富山の薬売りは、農民でありながら、行商人として商業者であり、薬の製造を通じて工業者としても働いた。同一人が農商工の三者の役割を果たす農商工連携を行っていたことになる。

富山生まれの筆者は、先人達の大変なご苦勞の上に現在があることに感謝するのみです。

（「企業診断ニュース」2010年2月号から一部抜粋）

〔2015年度近畿支部幹事 川淵浩之（富山高等専門学校物質化学工学科）〕

©2015 The Chemical Society of Japan